になり申よ【彌】おらアはあ替る事じやアねへからお身樣替らねへやうにして吳さつせへ【田】そりやアはあ氣遣ひさつしやりますな【彌】思ひだした約束のふんどしサあしたでもよこすべへ【田】まだ遲くつても忘へが色アあんだアへ【彌】强がよかんべへと思づて手織の木綿のウ上紺に染させたアよ【田】そりやハアー四五年はこてへべへ【彌】あせだかハア今夜アげへに寐づれへやうだ【田】モウ今度から追分イはいかつしやりますなよ【彌】アニハアいく事じやアねへよモウなん時だアかとなりじやア起たアげだ【田】隣ア旅人衆だからおきたんべへまだでかへ早へ一ね入しますべへ【彌】そんだらちつとの內ねべへかい【田】わしが能時分におこしますべへ【隣かる】何も落しやアさつきやりましねへか【伊】いゝにへよし〳〵【嘉】わしが拵袋はそこかいナ【伊】いゝにへ爰にやアごせんせんどうして又なくなりやした【嘉】いやアノさいせん小刀をつかふた時に取たさかい【伊】そんならごせんせうよく御覽じやし【嘉】ヲ、あつたわいナ【うき】わしやア又何の事だと思つたら脇指の革頭巾の事たアね【さ】來はいお荷物はみんな付ましたよ【伊】アイお世話〳〵【嘉】何でも夕からみんなごなさんのお世話じやの【さ】ナニお前【伊】サア參りやせうアイ、大におせわに成やした【かる、うき】一同そんだらきげんよく立つしやりまし【嘉】アイおさらば〳〵【さ】どなたも又お上りもなせんすなら必おたづねなすつてくださりまし【伊】そりやアもう恕在へはなしさみな〳〵表へ出れば【亭主】をはじめこゝに左樣なら御きげんようお靜にめしまし【嘉】アイ湯治にでも上つたら又よりやせうハイ【さ】ハイあなたお笠を○あいと手に取菅笠の白きを見れば夜ぞ明にけり東雲の心うきたつ街の音夢に見てさへよいといふその春駒に乘初の仕合よしや木曾始商ひはじめ雉はじめ笑ひはじめになれかしとはじめて馬鹿を又つくす盡せぬ無のお目出たに愚作は堪忍信濃新板〳〵

道中粹語錄終

和漢同詠道行

自序

天神七代地神五代の間の宿に、通神十八代といふ時ありき、この時世界通にして、天竺にては大通佛、唐にては漢通ども、梵字の阿字の夕が、しを蓼びやにし、文字の四角な玉子をも、ふは〳〵にしてのみかけければ、まして和國のいろはにほへとちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、道行和漢同詠衆、からもやまとも色事の中は丸山たゞ丸かれと、思ひそめたる筆ずさみ、時代をおして考れば、凡十千萬八千年以前、わい〳〵天皇の御宇にあたれるとぞ、

馬鹿羅州

阿林子題

千年の怨夢一時につき、ともに北邙山上の煙となり去あだひとを、戀こがら去の涙の雨、言のは草や去めるらん、二人出むかしを今の珍々說は、こいに心もから國の、四角な文字も丸やまに、かどのとれたる東國や、これも他生うの去ん山、といちがのながれ河竹の、ふしどをいで去二人つれ、から子わげにはさつまぐし、去まだわげにはとふ櫛と、昔の人の筆のあと、いま身のうへに東坡きん、ひと目計りの頭巾きて、宋儒のづきん氣象とや、かたい男も大日本、和らぐふうぞくいつしかに、色を色としけん〳〵と、あさるきゞすのつまこひに、おのがありかは人のくに、海をへだてゝおせゝを持ば、つきおちからすなくさへも、氣にかけこゝろおく霜や、姑蘇こそ城の鐘のこへ、なるは夜はんか有明か、ふたりが命捨かねの、つく〳〵顏をうちまもり、緣はいな物からやまと、二せん里外の人ごゝろ、四かいのうちは兄弟と、云へど妹脊のみちならね、みちにまよいし不倭こそ、戀の重荷のそれならで、こいのぬけ荷と謂

べし、不佞はきのふからたちの、歸國おもひたゐはてて、この日の本のつちくれと、なるも死生は天の命、足下は命ながらへて、春秋二分の墓まふで、跡弔ふがよか〳〵と、あとはことばも泪なり、圓山かほをふりあげて、そりや何なんの南京の、ちやわんと茶碗のなかならば、それ其樣などうよくな、おまへと私がその中は、きのふやけふの古渡りか、玄んとの時からなれなじみ、夫おぼへてかつき出しの、三五夜ちゝの新月に、おまへのあふぎにかゝ玄やんした、詩とやら朱とやらいふ物の、色といふ字がめにとまり、戀のいろはに惚れたが因果、おまへが床に空だきの、かをりは何か名香の、ふつと心があじになり、つとめするみもつとめぎを、はなれて居れば片ときも、格子へ出たりなが廊下、ゆきつ戻りつうはざうり、花をかざれる當世の、ほんだの髪やきん〳〵の、くろ仕立より私その、びんひげ玄やんとそうがみの、おまへのやふな唐ふうが、しみ〴〵すいたすき櫛は、何ぞと人が唐櫛の、四百四州をたづねても、又と唐にもあろかいな、こんなゐにしであろふとは、ほんに結ふの神さんの、思ひつきとは云ながら、あんま

りこれはけうといと、心で心といめても、とまらぬものは色の道、そうまあ思ふてくれたけの、ふしぎといふもふしぎのゐん、珍々說も泪ぐみ、足下の言をきくにつけ、むかし大王その妃を愛し、岐山のふもとにいたるといひ、卓文君を司馬相如が、琴でいどみし色絲の、みだれ心にくびれては、匹夫匹婦も講讀に、まことをたつるみさをあり、こなたへ來れと行さきか、向ふの二階は何やとも、玄らぬが佛の大さわぎ、「難波の梅に吉野の櫻、うつす一ッの鉢うへの、柳の枝に咲せたい、なんといきてはないかいな、「京の女郎に長崎いせう、江戸のいき玄にはれ〳〵と、大さかの揚やで遊びたい、なんと通ではないかいな、うたふをきくも我〳〵は、あづま男に京ならで、唐土人に東の女、大和ことばや詩に、かきつくされぬ胸のやみ、よ玄ないくらうする墨の、氣叶金蘭おみなへし、われもかうとは夢にだも、夢のうきは玄とだへして、峰にわかるゝ横ぐもの、空に浮名や立ぬらん

引返し

ひやうし幕

一百三十六地獄の惣たばね、御ぞんじの閻魔大王は、今におとしも寄らせられず、亦お若くも見え給はず、髭は長くて玄ゆゐ帝のごとく、顏は赤くて朱ぬりに似たり、唐冠に王の字の將棊の駒を頭にいたゞき、せつかい共見え摺子木共見ゆる笏を御手に持て、高座を一つたゝき給ふ、御面相は、何所へ出しても天晴湯したの公家あく、玄ばらくののうけとみ奉る、然るに大わう近ごろは、娑婆一統に大通になつて、面玄ろきことありと聞、藏前の出店に計りおわせしかば、氏よりそだち町風にのみなり給ひ、折〳〵淨はりの鬚ぬき鏡をもつて、自らお顏を見給ふに、知らず明鏡のうちに何れの處にかぬり机を得たるとあやしまれ、野父な身形りをきらひ給ふ、時分はよしと足疾鬼かうちに、居候の惡鬼といゐる者、よしなき御むほんをすゝめ申けるは、大王は十善とやら九善とやら、七五三とやらの御位にましませ共、極樂といへる本店あれば、いはばぢごくの支配人も同前、娑婆にて人が一トくちに、十王〳〵と云時は、君もやつはり十王のあたま數にて、宗帝王や五官王は、役儀もつとめず世話もやかす、濡手で粟と云もの成るに、大王

計りは夜る昼るとなく、面白くも無ィ罪人の世話計り、出る株うたれてひとに悪れ、閻魔様といえば子供は勿論、女迄がいやがる様に思れ給ふは、さりとは不通の至りなり、大王今よりくつと地獄をきり替て、町人堅きの問屋となし、大王其店の支配にんとなり、九王は番頭或は出店、かよひ伴頭などゝなえ給はゞ、金銀ぢん〳〵きん〳〵として、そこで地獄の繁昌せん、其マア野父な唐冠を、目計り頭巾と替え給ひ、乞喰能といふ裝束をば、黒仕立の三ッ紋と改メ、髭は元々月代そり、青黛ぬりの藏前本田、笏といふ場を扇ばち〳〵、鐵の棒をはり交の銀ぎせるのやに下りて、づつと世界を見おろし給はん事、日本といふ通ではないかと、竹のあぶらをとうんしにぬるごとく、とろりとろりとかけのめしければ、大王元よりうかつの生れ、忽御同心まし〳〵ければ、さいの河原の地藏菩薩を以て、極樂淨土へ此趣をうかゞはれけるに、六道能化の和尚なれば、そこらはやる物にあらず、釋迦の御前の上首尾にて、尤もなる願のおもむき御聞濟ありければ、即座に地獄えふれをまわえ、向後王様こつこを止めにして、町人といふ身持となり、身

代をきりかえんとて、先今迄の閻魔大わうでは、つまらねは、とりも直ずえんま屋大藏となのり、來ル正月二日よりの見せひらき、一番伴頭秦廣王は、秦兵衛と名をかへ、二はん楚江王は江助となり給ふ、此二人はふるくも勤し者なれば、出店をやりて通ひ伴頭、扨三番よりい下宋帝王は宋助となり、此見せの伴頭えよく、五官王は五兵衛と成て伴頭わざ、泰山王は山藏となり、平等王は平兵衛となり、都市王は市右衛門と成り、轉輪王は輪藏となり給へども、變化王計りは變右衛門でもなく、化藏でも呼にくしと、色々附やうにこまり給ひしが、せん方なくて變智氣からの思ひ付で、變吉と付給ふ、各名札を上にさげ、そろばん附の硯箱を扣え給へば、俱生神も五兵衛と改め、くろがねの帳は西の門の帳めんに、さなたの紐とかはり、時行風大福帳、罪人出入帳、三途川水揚帳、極樂六道諸狀差し、男は裸百貫目、女は時の相場知死期の時貸不仕候と、筆ぶとに見えらせ、ごうのはかりの分厘をあらそひ、淨はりの鋭も掛硯の引出しに納め、あほう羅せつは丁稚子供、見る目かく鼻まんびき用心、せうづかの婆はすゝぎせんだくまかないはゞ、釼の山も細身となり、血の池でひはかたを織り出し、餓鬼道から松右衛門が札をとり、畜生道から皮布をぢいれ、修羅道の具足も質物に入、金銀かし付の證文えんかく店おろしには、天上界の天上見るやからも多かるべし、猶も年々男女の罪人澤山に仕入れ、古今無双の大安賣をせんと、引札の支度をし給へども、昔は一ッ軍に人の一ッそくも二ッそくも、一時に死で來りしが、今太平の御代となつて、切たりはつたりはあがつたり、民のかまどの味ひ物ぐひ、萬民快樂のときなれば、分別も無く子計り拵へ、御子孫も繁昌御壽命も長久なれば、地獄の衰微大かたならず、折角はやり風がしても早替の狂言のごとく、引かへしの拍子幕計りで死ぬ程の事もなければ、地獄以の外のふけいきにて、弘誓の船の舟間なり、寄て大藏工夫をめぐらし、むかしから金銀出いりで生死は無い物なり、但し與一兵衛は非業の死でもお年の上、勘平どの〳〵三十や四十餘人の忠義などは、今どきとんとない點なれば、中〳〵もつて死ぬ程の事なし、まだ頼むべきは色よくの道計、六塵の樂欲多しといえども、皆厭離しつべし、只彼一ッ例

刻のまといには、老たるも若きもはまる習ひ、色は思案橋の外とかや、我より年の親父はしの若衆にくひこみ、本山ゑ尻が割れて傘一本の主となりし住持も有、又は今ての大分限ときいて、鬼門の角やしき千兩屋しきの四五ヶゑよも、大門口から水戸尻えたゝき込たる息子もあり、此ともからのゆく末は、或ひは野原に行たおれ、町内のやつかいとなり、仕舞は此方のものとなれとも、上代物とはいひかたし、又はあそこの娘をそゝなかし、隣の下女を孕ませて、せう事なしのむり心中、月水流しの早業も、獨鈷や錫杖の形りで來れば、まだ人間の形もなく、是等は問屋の損金物、ひけもの〳〵部に入るなり、され共今とき萬民無病そくさい延命の世にも、まだしもひよつと色事で死んでこまい物でもないと、結ふの神を信心してまつり見ば、利生のあらぬ事はあらじと、娑婆で町人が惠び壽講をする樣に、同店の伴頭を呼び集め、地獄はじまつての大ぶる舞、血の池のいけすのひ鯉の吸物に、八苦の海の鯛ひらめを、三途川の河岸から取寄、無けん地獄のひるのなますに、劔の山のけんをあしらい、極樂淨土のおがみ突きの食に、後段はさしづめ黒繩ぢごく、繩のごときの手打そば、すべての鹽梅等活ぢこくのくわつ〳〵と炎立、同じ火の燒物やくろがねの膳部を、百萬人十千萬にんと手を打ちて、叫喚大けうくわん、馳走馳々走天迄ひゝくほとさけびよばつて祝ひしに、おもてのかたよりとりつきの青おに手をつかへ、何か娑婆から入船がこざるといへば、さてこそ來りと手をうつて、ゑて〳〵其代物はいかに〳〵とゝへば、年の比二十あまりの男と、みめ能きおんなの上しろ物、男は菅笠を着女は笹をかつき、物ぐるわゑき風情なるが、ささしくあれは清十郎じやないか、笠がよふ似て候と申ける間もなく、淨瑠璃のひゝきにつれ、初日かお夏清十郎の道行、扨二日めはいかゞならん、朝はとくから〳〵入來る〳〵、もふゑのゝめに程近き、夜もはや七つ半兵衛か、かたに懸たる毛氈を、かふりし夫婦養子合、三千世界の戀の淵へ、おちよとこそはゑられたり、三日はさしつめ桂川、連理の枝の初紅葉、風のかけたるゑがらみや、おはんをせなに長右衛門、片肌ぬきし大名島、島さん紺さん中乘さん、やてかんせほう羅んせには、前代未聞の大いり船、地

ごく開けはじめゑより、古來まれなる繁昌にて、歌舞のぼさつの棧敷より、五百のらかん弘誓の引船、引もきらざる賑ひなり、さて四日目はいかゞならんと、午頭馬頭あほうらせつ共、見世先きに立河岸にいで待みれば、何かは戀風さつと吹、東坡巾に道服着たる異形の唐人、一ト人は夫に引かゑて、戀に心もうつ蟬の、もぬけのからのからひとに、宿かる燒のそれならで、京都丸山のうかれ女、名も圓山が立姿、さすがのゑんま屋大藏も、此ゑろ物にはほとんとへきゑき、今迄心中みつがいの、代ものゝなかゑいれんとすれば、唐ものが交りて賣にくし、唐物屋へわたさんとすれば、和物と一ッ所で似せ物らしく、いま迄ついに地ごくの繪にも見た事のなひ唐人の罪にん、いかゞはせんと付送りの書附をみ給へば、何々洞庭の秋の付送り、四角な文字に韃字を交へ、ちんふんかん〳〵うさ〳〵うさきかもうさきがちんぶりかくたくちんないろうゑやぐわん〳〵、是は行ぬと遠さんが書附には、馬から乙うありんすヨウ、おいらんが申ゑんす、向ふの人々と何やらすつへりがてん行ず、此樣な和かんこき交ぜし品の分らぬ目利には、隣町の組合仲間、國せんやの和藤内殿が功者なれば、是足疾鬼一ト走りといへば、アイと返事もかる〳〵と、迎ひに行より早く千里行て千里歸る、千里か竹の竹町の方より、でつちの虎を一人連れ、唐棧留の日本風、泡つ〳〵入來る和藤内、昔は三官今は又、六貫と成る錢相場時の相場のちよ〳〵らをもつて、此代ものを見分たる、商ひ上手の見功者は、久しい物だが後編々々、又明晩お出でなさりませ、

附錄閻魔考

○法苑珠林卷十二に曰、問地獄經及淨度三昧經等にいはく、地獄を總括するに一百三十四界あり、その獄主の名字を閻羅王といふ、むかし毗沙國王たりし時、つねに維陀始生王と、もに戰ふに利あらず、因て誓願をたて、地獄の主となる、その臣十八人あり、百萬の衆を領す、毗沙王とは今の閻羅王是なり、十八の大臣とは、今の諸の小王是なり、百萬の衆とは諸の阿傍是なり 畧取意

○同書に曰、長阿含經にいはく、閻浮提の南に金剛山あり、內に閻羅王宮あり、縱廣六十由旬、晝夜三時つゝ大銅鑊自然に出現す、もし鑊宮中に入れば、王見て畏れ怖きて宮外に出、もし鑊宮外に出れば、王宮中に入る、大獄卒ありて王を熱鐵の上に臥しめ、鐵鉤を以て口をひらき、洋銅を口につぎこむ事竟て、又もろ〳〵の宮女と相たのしむ、かの諸の大臣といへども、亦かくのごとし、

○十王經に曰、閻魔王宮本地地藏菩薩 閻魔王國を無佛世界と名づく、亦預彌國と名づけ、亦閻魔羅國と名づく、

○奪衣婆は葬頭河の婆なり、懸衣翁はさうづがはのぢゝいなり、同經に見ゆ、

○丹桂籍卷二に曰、もろこし景泰年中臨清生員李清といふもの病で卒す、閻君問ふ、世にありて何の善事をなすと、清こたへていはく、四月八日釋迦の聖誕にあふごとに、持齋一日念佛萬聲となふと、閻君善と稱す、因問ふて曰、わが十主の生辰には何ぞ人の持齋念佛せざるや、若念佛せば罪過を除き天道に生ずる事を得ん、

十王誕期

正月八日　第四殿伍官大王聖誕
二月一日　第一殿秦廣大王聖誕
二月廿七日　第六殿變化大王聖誕
二月廿八日　第三殿宋帝大王聖誕
三月一日　第二殿楚江大王聖誕
三月七日　第七殿泰山大王聖誕
三月八日　第五殿閻羅大王聖誕
四月一日　第八殿平等大王聖誕
四月七日　第九殿都市大王聖誕
四月廿二日　第十殿轉輪大王聖誕

按にこれによりて見れば、閻魔大王の御誕生は三月八日と見へたり

○瑯琊代醉卷五に曰、閻羅王に二人の子あり、長を江と名づけ、次を海と名づくと、庚巳編に見へたり、

按にゑんま王の御子息の御名こゝに見ゆ、

○三千國春秋にいはく、顏回卜商ともに地下の修文郎となると、 蒙求

○明の田汝成が熙朝樂事に曰、七月十五日俗傳て中元節とす、是地官罪をゆるすの辰なりと、

按に俗に地ごくの釜のふたの明といふは是なり、

扶桑略紀に、日藏といへる僧死して蘇生し、延喜の帝の地獄に墮給ひしよしをいへり、

○元亨釋書に云、小野篁は不測の人なり、身は朝廷にありて神は琰王の宮に遊ぶと云々、

○紫野一休和尙の佛鬼軍には、極樂と地獄とのたゝかひをしるせり、文長ければ略す、

○難波西鶴が小夜嵐に曰、天下たいらかの御代につれて、二世安樂の物語こそ出來たれと云々、源平兩家のつはもの地獄をほろぼせし物語にして、其文長し因て略す、

右の諸書を詳に披閱して考ふるに、此書に云るせる事のごとくなる事、つゆ〳〵見あたり侍らず、もしくは後人の僞り作れる所歟、たゞしわが見る所の足らざる歟、いぶかし〳〵、陸道謹誌

跋

此一卷を熟覧するに、何とも其意をんま王、まことに文盲大斎日、十王が名をかへし、名びろめのすり物もなく、地獄繁昌の安賣も、こんなはなしが唐にもあろか、予八角眼回々鼻の如くに首をひねつてかんがうるに、これはまつたく血の池の真赤な虚言、等活地ごくの鹽硝に、黒縄ぢごくの火縄にて、鐵砲玉の丸山雀、とんだ色事道行の、長崎名物くらげとう、骨なき事と去り給べかし、

ズボウ堂のぬし
淡夕吐

和漢同詠道行終

春笑一刻

序

おとしばなしは人の笑を種として、萬の寶かきあつめぬる物ならし、いでや春笑一刻も、直は千々の金をひらふて、浴衣を染んと思ひたつ、肩にかなてこ裳にいかり、硯の海のそこはかとなく、かきの暖簾のまめなる家にも、春のはじめの御もてあそび、恵方に向つて沾らんや〳〵、我は賈をまつ茸うりの名にしおふ、臍の下谷の出茶屋にして、筆のけん毛をむしる事去かり、

見料の安らけく永きとしの尾をふる戌のむつまし月

千里同風

春笑一刻

千金子 著

初夢

あら玉の年たちかへるなみのり船の、おとのよき初夢を見んと、宵からとろ〳〵ねた處が、さて初夢を見たとも〳〵、一富士二たか三茄子、伊勢や日向の物語、白河夜船の夜分の景色、荘子が蝶々盧生が五十年をつつくるんで、一百五十ほどもつゞけて夢を見ければ、いづれをいづれと定がたく、あくる日早早七福神のかけ物にむかひ、さて〳〵昨夜はおびただしい夢の御告、どふも目うつりがいたします、とてもの事にあのうちで、一色を初ゆめにいたしたうぞんじますと、おそれみ〳〵申上れば、七福神は目と目を見合せ、うか〳〵と乘合ではなしもならぬ、

梅に鶯

このごろ湯島で、はれな花の會があると、本庄のかかゑ屋敷へ行て、紅梅のことに見事な枝ぶりおもしろきを、人足に切らしむるに、此枝に鶯とまり居てさもたのしむていなり、此梅が枝に鶯のとまりなが

らをたてるは、ことにめづらしからんと、人々にいひつけ、やう〳〵鳥の飛ばぬやうに引切、そろ〳〵歩行み町中へ出ければ、子供大勢あつまり、見事な梅に鶯かとまつてゐる、わしにもおくれ〳〵と、聲々とわめけば、たちまち鶯とびさりぬ、南無三寶、此梅に花がなくは、もらはふともいふまいよ、

問答

海鼠蟹に問ふ、行がかへるか歸が行か、蟹なまこに問ふ、尻が頭か頭が尻か、

金が敵

尾羽うちからした浪人あり、かみこ羽織にやぶれば かま、竹みつか何か去らぬが、朱鞘の大小、めつたに利運ばつても、晦日〳〵の店ちんにおはれ、大屋を見ると武者ぶるい、大屋も氣の毒がり、あまりにくよ〳〵思召すな、金がかたきと申て、あまりに金もよい物ではない、浪人なみだをながして「よつく武運につきたさふな、敵に久くめぐりあはぬ、

恭將裴

どふもひまで、身にもちあつかうが、なんぞよいなぐさみはあるまいか、「それには恭將裴がよふござります、「恭とせうぎとはちがつたものか、「ハテ字のあるが將裴のこま、字のないが恭石でござる、少しまあ「そんなら恭を打ふ、

誹諧師

誹諧師吉原へ行、中の町の花を見て、ハツア花の雲鐘は上野か淺草か、女郎聞て「おきないにいか「よく去つて居るな、

色男

髮は本多に銀ぎせる、青黛ほそ眉うすげしやう、自ら大通の氣どりにて、ひげなでのきん〳〵と、茶坊主にむかひ、さぞ世間の者どもが、おれにほれるであらふな、茶坊主「多くはござりませぬが、たつた一人ござります、「去て〳〵それはだれじや茶坊主「おまへが

安たばこ

いなかからの客が、たばこをきらしました、一ふくくださりませといへば、そ葉じやがまいれと、こくぶをだす、これはありがたいとのめば、ついぞのんだ事のないよいたばこ、どふもわすれられず、たばこ屋へゆき、そはといふたばこがかいたいといへば、「アイこれになさりませ一ぶくのんでみて「いや〳〵これはよしませふ、「イヤこれより去たはござりませぬ、「ハテびんぼうなたばこやじや、

かはづ

かうしに女郎二三人よりあひて、けふは助さんがみへぬといへば、ナアニあの人は道風さんさ、これは去たり、もんはぎよやうぼたん、どう見てもすけ六さ、「それはきつい見たてちがひ道風さんさ、「ナゼ道風さんといひなんす、「ハテかはずに見とれさんす、

鏑

コ、か、あけぬきはないか、女房又きたねへ處を、ぬかふと思つて、てい主「ばかをいへと女房「それ〳〵きたねへ處だもの、「何こ、がきたねへもんだ女房「夫でも不斷ふんどしをはさみながら、

酢の物

ばつち尻は去よりで二三人、午の日の王子參り、あすか山下の茶屋で、なら茶をくひ、なんだ芋に午勞か、煤はきの料理を見たやうで、ねからいかぬ、御てい主こ、にわつさりと、酢の物といふ處はねへか、ていしゆ小く「左樣な村はござりませぬ、

黄金の釜

もろこしの郭巨は、こがねの釜をほり出して、二十四孝の中間入、さらばわれらもほつて見んと、乳のみ子を抱ながら、川口をふた鍬みくはほれば、何かがつきり、是はとみれば「ことう土器、

引窓

ぬす人、ひきまどより繩にとりつき、ぶらりとさがり、内のやうすをうかゞひ見れば、てい主見つけて、ヤア何者じや、月夜に釜をとらふとは、ふといやつといへば、ぬす人「イヤ〳〵、水がめの月をとりに參つた、

うば

打つゞく長雨に、でつちうば相談して、餅でもかつてこずはなるまい、たれゆけ、かれゆけといふに、うばが年かさなれば、差づめうば、かのもちをとりかへれば、人〳〵これを見て、アノおうばどのとした事が、大きな切り餅ばかりかつて來てからといへば、うば「こもちにこりた物だ、

肥滿

貴公はよくふとつて居る、さりとはうらやましいといへば、ナニサ此よふに見へても、半分はあかさ、

堂建立

弘法大師は、處々に堂塔をこんりうして、一夜の内に出來たといふが、なんと大きな事ではないか、「それがなんの大きな事であらふ」「ちつといけむと蛤でさへ、

かみなり

日輪と月輪出合て、これ〳〵月りんどの、拙者は近近冬至邊へ參らふと存る、貴公にも御同道申たしと、そうだんと丶のひたるを、雷がき丶つけ、御供いたしたしと願ゆへ、つれてまづその夜は一つ宿にとまり、どふも雷がごろ〳〵で、やかましくてねられぬゆへ、月と日がだんかうきはめ、其翌日はかみなりを、跡の宿へとめ、翌朝さそひにこぬうちに、月も日もたつて行し跡に、雷が來てたづぬる、宿のていしゆ出て、もはやとうにお立なされましたといはれ、雷兩手をくんで、扨て〳〵月日のたつのははやいもんだ、

代脈

はやり醫者のむすこ、とかく醫道にうとく、當世風のいきなりふりのらくらして、藥もろく〳〵覺へねば、おやぢむすこをよび、明日は用があるから、その方代脈に行べしといひ付られ、かしこまつたと、翌日乘物にのりちらし病家へ見まへば、御親父樣の御りやうぢで、今日は大ぶんよろしく、隣へちとはなしにまいつたの、いや一家どもへまいつたのとて、脈みせるものもなく、はやく歸る、親父いかゞとへば、右の通をはなす、親父まゆに玄はをよせ、それみおれ、おのれが不斷そは〳〵玄おるによつて、病家ども殘らず本復をつかつた、

ほうらい山

ほうらい山と名をつけた蚊屋がある、ソレハさぞよい蚊屋であらふと行て見れば、松竹のもやふをそめたもじのかやなり、よさはよいが大分やぶれが見へる、「ハテそこがほうらいの玄るしだ、なぜといへば「つるとかめがゐる、

彼岸

ひがんといふものを見たが、「これおのしはとんだ事をいふ男だ、「イヤたしかに見た、「それはどんなものだ、「なんだか玄らぬが、庭をむく〳〵するから、眞木をもつて飛おりたら、おふくるが「これ〳〵、ひがんだぞ〳〵、

鞠

御むしんながら、鞠をちとおかしなされて下さりませ、「アイおやすい御用でござりますが、此方にもふつていで、一ッの鞠を四人でけております、

ばけ物

ばけものやしきへ見とゞけにゆきしに、いろ〳〵のばけもの出る、此おとこ少しも臆するけしきなく、もう藝づくしはそれぎりかとせめられ、ばけものもこまり、その丶ちは出ず、さて〳〵たかの玄れたばけ物めといふうち、玄の丶めのそら、烏がかあ〳〵、間もなく日も出れば、さらば歸り、此おもむきを申上、御ほうびをもらひ、此やしきぐるみしてやらんと、よろこびいさみて外へ出ると、まつくらになり、星月夜、これはひとあしもひかれぬといへば、ばけ物「何ンとあたらしいか、

風

浪人かみこはおりに、赤鰯を一本きめてゐるく、跡からもし〳〵、おわきざしにそりが打てござります、浪人「今の風でさ、

飛脚

早飛脚、いきを切つて、京から江戸まで三日につく、「ドレ〳〵なんぞ急用だらふ、書狀はどこにある、「イヤ御狀はまいりませぬ、「シテ〳〵何用にきた、「サラバ何事でござるかぞんじませぬ、「大べらぼうめが、何ゆへに飛脚にきたと玄かりつけられ、「いま〳〵しい、今夜から狀のない飛脚などにやとはれるもん玄やアねへ、

玄ん宅

新宅へひきうつり、三助がはき掃除の處へ、近比御無心ながら、雪隱をかしてたもれ、三介「おやすい事ながら、けふはじめて引うつり、まだ主もはいらぬ内でござれば、御斷申ます、さむらいも玄かたなく、尻もち〳〵して出て行、旦那き丶つけ、三介を玄かり、跡よりおひかけて、おかし申せといはれ、はうきを打すて、やう〳〵おひつき、旦那に玄かられました、ひらにお返りなされ、御用御たしなされませといへば、侍少しはらをたち、かへつてそふ申てくりやれ、たれたも同前でござる、

ひきはた

章魚わきざしのひきはだをひろひ、これはよい革單

皮だとはいて居るを、うなぎが見付て、八本の足に一本ばかりたびをはいては、寒さふせぎにはなるまい、おれに下されともらひかくる、たゝ「そして貴様は何に去やる、うなぎ「おれがもつと火事羽織にする、

あたまはり

はなうたをうたひ通る行ちがひに、去たゝかあたまをはる、大きにはらをたち、すいさん千萬、弓矢八幡ゆるさぬと、とびかゝるを、ささまはたとへを去らぬ男だ、「なんだ、「ハテ出る首うたるゝといふはさ、

乞食

武士の眞似をする乞食あり、やぶれごもを上下として、犬を引馬とし、又は竹の先をそぎて鎗をこしらへ、毎日ふり廻して、往來の邪摩にもなるほどなり、ある日蛇塚蛇五右衞門殿といふ武士一人通りかゝりしが、かの乞食の竹鎗、武士の眉間にあたり、疵つきければ、蛇塚大きにはらをたち、かのこじきをさん〳〵に胸打しければ、もはや息もたへ〳〵になる時、つれのこじきどもさま〳〵とわびごとして事すみたり、さてうたれたるこじきは、手足もなべて、小屋へ歸る事もかなはず、つれのこじき口々、にこんな事があらふと思つて、毎度異見をするのだは、モウ〳〵ふつ〳〵武士のまねをやめやれといへば、何がさてこれにこりぬ事があるものか、なにとぞ小屋へつれかへりてくだされと、手を合すれば、つれの乞食もあはれに思ひ、やぶれたるむしろのもつかうにのせて、かきあぐれば、くるしき息の下よりも、ヤア家來ども駕籠やれ、

浦しま

うら島太郎乙姫にむかひ、故郷こひしく候ゆへ、一寸かへりましたれば、これこのやうに年がよりました、何とも申かねたが、玉手箱をも一ッ下されかしといへば、乙姫うなづき、左樣ならばこれを以てお出と、例の玉手箱をわたされしかば、浦島なんでも、玉手ばこは、さだめてわかくなる箱であらふと、海上へうかむやいなや、蓋をひらけば、こはいかに、あつちから三下り半の去り狀、

まごの手

なんぞ風がはりの道具をかはんと、うろ〳〵見廻り、將裝ばんの兩めんはないか、道具屋もあきれはて、ハイ出來合はござりませぬ、そんならよしと、又一軒へ行、なんとちろりの兩口はないかとたづね、サテ〳〵、下町でも思ふ樣な物はないとつぶやき、そんなら孫の手のにぎりこぶしはないか、道具やなぶりけると思ひ腹をたち、にぎりこぶしはこゝにござると、腕をまくつて出せば、買手コレ〳〵、ちつとせなかたゝいて下され、

かるわざ

上竿奴ぢこくへ落て、閻王の前に引出されしかば、汝去やばにありし時、人の目をかすめて、錢をせしめし咎により、劔の山の責に申付るとのたまへば、是はゑん王の仰ともぞんじませぬ、拙者魔術はおこなはず、人の目はかすめず、幼少より去ゆれんにて籠ぬけつなわたりを仕と、席をたゝいていふに、大王ほく〳〵うなづき玉ひ、然らば汝が術が見たい、去よもう〳〵とのぞまれ、ずつと立て、さて御斷申上まする、籠はなし、綱はなし、あれなる赤鬼の口よりはいり、尻へぬけて出て御目にかけます、いづれも樣おはやしなさい、おつと心得たと、どら鐃鉢をたゝき立れば、その拍子に口より尻へぬけて出て、さて是よりは尻よりはいり口へぬけます、鬼熱をつま

みて「夫は御免〳〵、

錢湯

ごめんなされい、冷物でござりますと、ずつとはいつた處が、熱湯にて、中〳〵下に去づむ事ならず、是はあついと風呂をたゝけど、一向うめる樣子なし、あまりあつさに飛出て見れば、腰から下は眞赤になる、コレ番頭どん見てくんねへ、おれがなりは去つかい寶引なはの樣だ、

寺侍

侍奉公人ふたり出合、イヤア新五、貴樣はどこに居る、「四國のさるやしきに、ソシテ「きさまはどつちにすんだ、「谷中の道樂寺に、「寺にはなんぞおもしろい事でもあるか、「あるとも〳〵、小僧は今川をよむ、和尚はいろはへ行、

硝子

中洲の新地にびいどろ細工があるといふが、どふだ、「イヤハヤきれいなさいくだ、てうどよい娘をさかさにつるした樣だ、

精進

下女のさんをよんで、今朝もらつた肴をにてくれろ、女房「モシへ旦那さま、今日はせう去ん日でござりますす、「マテヨけふは何もせう去ん日じやないはづだが、女房「けふは先の佛の日でござります、「なんじや、先のほとけの日だ、夫になんの精進する事があるもんだ、女房「おまへさまもよふ思つてもごろうじませ、先のぬしがかせがれたればこそ、かやうに安樂にくらすじやないか、「おれがなんぼ入智じやとて、そのやうにおれをふみつけにする、いま〳〵しい、是非〳〵肴をくはねばならぬ、「イヘサなんのおまへをふみつけにいたしませう、去かしけふはどふぞ精進なさりませ、「イヤ〳〵喰ふ、「イヤお精進をしてと、夫婦げんくわやまず、仲間八介きゝかねて、おくさまも〳〵、旦那さまもだんなさまも、なにおつ去やります、去かしおくさま、そのやうに先の佛〳〵とおつ去やつては、今の佛にさはります、

褌

隣のぼうさんおいでか、おかゝさんは何をしてじや、「おかゝさんは、椽頬で豎後節の本をよんで、「おとゝさまは、何をして、「おとゝさんは、椽頬でふんどしをよんで、

新宿

新宿の女、簞笥から錢を五百なげだし、是でなんなとうまいものをかつて來てくんなんし、若い者「これはきついおごりなさりよふ、おめでたふ存ますといへば、去「ほんに夢を見たやうに、夕べの客衆に耳をそろへて二分、

どうらん

どうらん癪をふるい、やせおとろへて居ける折ふしに、緒〳〵見まいに來て、どうじや食はなりますか、「けふは大分よくて、ねつけがとれました、「ハアそんなら落ませう、

うらなひ

狀箱持たる仲間、柳原を通りながら、さて〳〵、けさからさすがおやしきが去れぬ、たしか此邊だときいたが、もし間違は去なんだか、イヤさいばゐこゝに算おきがゐる、ドリヤ一ツうらなつてもらはふと、紙烟草入から十二銅ひねつて差出せば、算置小首をかたふけ、これは急なお使と見へる、「成程左樣でござります、「かはつた八卦のおもてがあらはれた、「なんとござります、「エヘ〳〵先の辻番に問ふべしとある、

五十服

コレ長兵衛、こんたはきつい煙草すき、一どきに何ぶくほどのみやる、五十ぶくつゞけてのまば一歩やらふ、長兵衛「これはけつかうなもの、五十ぶくや六十ぶくは、心やすい事、「コリヤおもしろい見物去ようと、そばからはやされ、のむほどにのむほどに、二十四五ふくのんで、「サテ思ひの外のめぬは、「イヤのめ〳〵と、段段ついであてがへば、三十四五ふくのみ、「モウ目がくらんでかなはぬと逃出す、跡より追かける、十四五町もにげし處に、大きなる寺あり、寺内へにげこみ、私は跡より追人のかゝるもの、なにとぞおかくしとたのむ、住僧きゝとゞけ、つり鐘をおろし、その下にかくし置しに、追人のものども、棒ちぎり水にてたづねきたる、住僧まことしやかにうら門よりぬけ出しといへば、誠と心得歸りけり、サアもはや氣づかひなしと、釣がねあぐれば、長兵衛大いきホッとつき、「キレ〳〵、氣づまり、まあ一服のませて下され、

春笑一刻終

鯛の味噌津

此おとしばなしは、今の蜀山人なる所謂四方の赤良先生自筆を、そのまゝに上木したる本なり、發客は飯田町中坂書舗遠州屋彌七、雪衣堂に開板す、

文化十一年甲戌卯月下院　　式亭三馬

叙

日々に新にしてまた日に新なる、はなしの種を買出されと、硯の海邊の市に立て、持たる筆を天秤となし、めつたにうりたいはなしたい、鯛の味噌吸に四方山の、はなしにひれはなけれども、尾に尾をつけて書つゞくれば新しうこそ腥けれ、いでや世上の話本、新背もあれば古背もなり、古きをたづねてあたらしき、譬のふしの鰹節、花に醉ぬる人ならで、櫻の皮を削りはべりぬ、

新場老漁書

御慶

元日の早朝から、御慶申入れます〳〵といへども、一向へんじなし、これはてい主がゆふべのつかれで、今朝まだねてゐるかと、勝手の方をさしのぞき御慶申入ますといへば、戸棚の中からてい主の聲にて「まづ行きまはつて來て下され、

から木

けふさる所でめづらしい木を見てきた「それはどのやうな木じや「なんでもみきが紫檀のやうで、葉がまるく、花はふじいろに咲て、大きな實がなる、その色がこいむらさきじや「ハテサテそれはめづらしい物、ソシテなんといふから木じやな「なすびといふ木じや、

三十ふり袖

善光寺開帳の頃、夜發二三人づれにて、兩國橋を通りながら、ヤレ〳〵きつい人ごみだ、おかいてうのうちは、通りがつかへてどふもならぬといへば、半元服のふり袖のよたかゝ、姉さんそういひなさんな、この前のお開帳のあつた年には、大橋をまはつた、

ゑびす膳

道樂寺の遊山和尚、晨朝のお勤をゑまひ、朝めしの膳にすはりて見れば、ゑびす膳にすへてあり、コリヤ小坊主なせいつもゑびす膳にすやるぞと云かれば小僧「それでもお大黒樣があるから、

仁王

仁王へ紙をかみてふきつけると、力が出るといふをきゝ、わかいもの二三人づれにてさそひ、ある寺の金剛へ、めつたむせうに紙をふきつけしが、一人ふところをさがしながら、たつた今はながみを出すとて、つい金を壹分おとしたといへば、つれのものうろ〳〵あたりをたつねれば、仁王も首をふりながら、からだ中を見てきよろ〳〵、

座頭

ある座頭の坊、うつくしき女房をもち、程なくうい子をもうけけるが、日夜膝の上にてそだてあげてかはひがり、そろ〳〵ちゑづく頃てうち〳〵あはゝとあやしながら、コレ〳〵かゝあどん笑ふか見て下さい、

樂

この頃さるおやしきで、樂といふものを見て來た、またはやしなどゝはかくべつ、位のちがつたものだ「ハアナそれはどのやうなものだ「イヤなんでも大皷の大きさが、能の太皷より五わりましも大きくて、笛といへば十本ばかりたばねて、一所にふいた、

提灯

隱居夜ばなしに行かへる、モシ〳〵おてうちんをあげませう、隱居あたまをなで「これにござります、

越後獅子

角兵衛獅子をまはす程に〳〵、つゝけて五百かまはしければ、角兵衛ゑしも目まい立ぐらみして、チトやすみまして辨當にいたしましたいといへば、インヤならぬ、つゞけてまへといはれ、よう〳〵まいおさめてかけ出すを、コレ〳〵とよびかへせば「もう壹歩でも御免なされ、

すい口

にはかの客に吸物をこしらへ、下女「これは去たり此間とつかへべいにやりました、

はなし本

なんと毎年はなし本も出る事ではないか、「ヲ、おれも壹冊かいておいたが、飛ださへたはなしがある、「ソレハどのやうな本だ、ちつと見せやれ「コレこの本だ、どうだよからうが「ツ、なんだかひとつもおとしが去れぬ、書きおとしたのではないか「ハテそこが落しはなしだ、

榮螺

壹文錢も百にわるほどの去はん坊客をよぶに、客四人と亭主と五人のさんようにて、榮螺を五つかひ、つほやきにして膳を出すまへかた、ふと客一人來る、なむさんぼうと勝手へ入、コレ〳〵さゝいのつほやきかひとつたるまいから、掃溜にあるさゝいがらに、午蒡や大根をきりませて、かならず是ををれにひけといひ付しが、いそがしまきれにとりちがへて、ていしゆによきさゝいをすえたれば、ていしゆふたをとつて見てきもをつぶし、モシ〳〵みな樣のうちへ精進のさゝいは參りませぬか、

諺

ぶきようなる男、つゝみをうちならひ、ふゑをふき、たいこにかへ、いろ〳〵とならひけれと、もとよりのぶきようなれば、ひとつもらちあかず、いや〳〵

うたひがよい物じやとて、人の十日であぐる謠を、百日もかゝりて覺へ、去かつぐらしく人中でうたひ出せば、友だち「なんと此頃は、謠御精が出るがよいおたのしみといへば、此侍「さればその事、侍はいつなん時浪人いたさうも去れませぬ、

佐治兵衛

ひとつ長屋の佐治兵衛どの、四國をまはつて猿となり内へかへりしか、今までなかのわるい女房をかあいがるゆへがてんゆかすと、近處のものにたづぬれば、女房の顏は馬つらたんのう、

歳暮

あるもの年始の禮にゆき、年始といふをとりちがへて、歳暮のご去うき申入れますといへば、てい主ぬからぬかほにて「これはあんまりはやゞと、

からし

二三人よりあひ、なんとからしあへをしてくはふではないか「ヲ、よからう、去かしからしはばらをたつてかゝぬときかぬから、おのしむつとしてかきやれ「ばかな事をいふ、そんなにやすくはらがたゝれるもんか、といふところへ「かつほ〳〵とよんで來る「コレかつほはいくらする「アイかけねなしに一貫さ「ソレハとんだ高いからかた身かはふ「そんなら五百だがよしかと、半分にすつとおろす「イヤモウいやになつた、かうまい〳〵「ナニ馬鹿〳〵しい、一貫のかつほを半分におろさせて、かはうのかうまいのといふ事かあるものかと、まつ黑になつてはらをたてれば「ヲットからしをかいてくんねへ、

足袋

さて〳〵この足袋のきれた事は、これは雪踏のわるい故だといへば、雪踏以ての外にはらをたち、私がとがではござりませぬ、ぜんたい足袋めが地のよはひでござるといへば、足袋も鼠色になり「イエ〳〵それは雪踏めがいひかけと申もの、あいつが鐵のあるを鼻緒にかけ、ちやらり〳〵と音をさせて、このやうにきれましたといふ「うぬ切付られるかと、雪踏がりきめば「コイツさしとふしてやらうと足袋がおこる、主も大きにもてあまし、それでは水かけ論といふものだ、足のかゝとをよび出して、急度せんぎをしてみんと、かゝとをよび付吟味すれば「わたくしは他出いたしまして一向ぞんじませぬ、

敦盛

とびのものよりあい、なんとあの一の谷で、熊谷と敦盛ときつたりはつたりやらかしたが、そのおりなぜあつもりはとつてかへした、おれならばいさいかまはずにげてゆくのにといへば「ソレハお三さんのいふ事だが、あつ盛も熊谷とはおもはなんだのさ、何か跡からやれ〳〵とよぶから、手拭でもおとしたかと思つて、

口上

同じ事をかさねていふものあり、ある時客によばれ、又二三日すぎて禮にゆき、此間の一昨日は參上いたしてまいりまして、種々いろ〳〵御馳走御ざうさにあづかりましてなりまして、その上又妻女房の方へも、おみやげのお心附をおくり下されかたじけなくありがたく、もつての外ことの外よろこびましてよがりまして御座りましてあります、

壺

そさうもの壺をかいにいつた處が、うつふけてあるをみて、此やうなべらぼうな口のないつぼがあるものかといゝながら、ひつくりかへして、これ〳〵底もぬけて居る、

折助

とうだ折助いそがしいか「いそかしいとも〳〵、供にはつれる使には出す、いま〳〵しい内だ、そしておのしはどうだ、三介「おらか内はそのやうに、いそがしい内ではないが、おれがすきでいそがしくてならぬ、折介「なんぞ細工でも出來るかといへば「イシャどうも流行歌におはれてならぬ、

魚歌

さんまと鰯と蟹と鮎と鯖とよりあひ、なんとみんな一句づゝ歌をうたをふではないか、まづさんまからうたやれといへば、さんま「さんまようと歌へばハ、ハ「いはしに「蟹あゆならはよとぢきにふたりながらつけゝければ、さばひとりもんく出來ず「さばよがどうした〳〵、

ばくちうち

ばくちうちさん〴〵不仕合にて、ごうはらまかせに手拭をまほし〳〵錢湯へゆく、道にて大黒をひろひ、これはなんでもいゝ見得だと内へかへり、神棚へあげ七日が間鹽ものだちにていのりける、滿する夜の大ばくちに、着ていた單物までとられ、ふんどしひとつで内へかへり、いま〳〵しいこの大黒め故に、このやうなめにあつたと、神棚から引づりおろし、どぶへ打込ぐつと一とねいりしたれば、かの大黒やう〳〵どろまぶれにてはい出たまい、ぜんざい〳〵汝われをうらむる事なかれ、湯へ行時にひろつたれば、はだかになつたはかくごのまへじやぞ、

すりこ木

コレ〳〵作右衞門どの聞なさろ、お江戸衆はおそろしい、毎日八丈八寸ある擂鉢を、がり〳〵かぢり申すといふ事つたよ、「ヲヤてんこちないあんとしてくはれべいぞ「ハアテお江戸は八百八町だ、もし毎日すりこ木で味噌をするに、一町で一寸づゝ減ると見て、さつとつもつて八丈八寸ではないか、

不動

なんと目黑の不動に、せいたかとうじ、こんからとうじといふがあるが、せいたかの方がせいがだかそうなものだが、せいたかもこんからも同じ事だといへば、そこで不動といふは、

はつ音

だれぞほとゝぎすの初音をきいたかといへば、きいたとも〳〵、きのふの朝きいた、ソレハおそい事、われらは四五日前にきいたといはれ、まんがちなやつが出て、いま卯月に入てきいてはおそい、先月の末にきいたといへば、そばからナニ先月きいたか、おいらはとつくに去年の夏きいておいた、

右左衞門

こゝに曾我五左衞門といふ浪人ありしが、折ふし信濃者を家來にかゝへ、一僕をからさず家につたふる竹光の一腰をわきばさみあるきしが、借はふへたり米は高し、とてもなからへ何かせん、いきてはぢをさらさんよりは、死で去まはんとかくごをきはめ、金の工面にゆくとて家來をだまして内を出ける、家來の信濃まことゝ思ひ、一日まち、二日まち、三日になれともかへらねば、ほう〴〵たづねあるきしが、ある川邊に何かは去らす、大せいの人あつまり居るに、何事ぞとたつぬれば、イヤ土左衞門でこざるといふ、どれ土左衞門とはどのやうな人と立よりみて涙をはら〳〵とながし、土左衞門どのとは人ちがひ、これはおらが旦那の五左衞門どのでござる、

鷲

鷲海上を飛行に、羽つかれやすまんと下をみれば、何やら丸太のやうなるものあり、よきやすみところとゝまりしに、丸太にあらでぶりといふ肴なり、「鰤大きにはらをたて、鰤つけ千萬なといへば、さぎあやまつて「まつぴら五位さぎませ、

角力

大寒小寒除寒八專、正月九日より晴天八日のすまふをはじめたりしに、除寒一人なにが褌ひとつになつて出て、相手にきらいはないから、たれでも一番サアこいとよばはれば、大寒小かん八專等、かたつはじめからひろいなげにあいける處へ、立春が見物に來て、どうだみなまけたか「ヲヽサ、かたつばじから除寒めに、ひろいなげにあつたといへば、「そうだろう、ことしは大分ひへる、

佐野行成

さて〳〵見事な御手でござる、これはいにしへの能書の佐野行成の筆の跡にもおとりませぬ、といふをきゝちかへて、そのゝちよき手てかいた物を見ると、ヤレ〳〵見事なお手でござる、いにしへの去やれかうべが筆にもおとりますまい、

むすこ部屋

唐の人はみな惣髪か、インヤ今は芥子坊主じやげな、阿蘭陀人は坊主あたまだそふだ、ヲヽサそれよりむすこべやの人が、あたまがおかしい「どのやうじや「なんだか中剃と月代がひとつになつて居る、

熊の皮

この間熊の皮の去き皮をもとめましたと見せれば、これはよい皮でござる、ドレ〳〵となでゝみて、サテよい心持でござる、

かゝみもち

をらがおもての鬱屏の彌介は、正月になると息杖に注連かざりをするが、尤な事ではないか、イヤそれよりまだおかしい事がある、おらが隣の飛脚の忠七は、足のうらに鏡をすへた、

番太郎

四方に四面の藏をたてたる大福長者、つね〳〵思ふに、われらがやうな福人は、ぬす人の用心がおもじやとて、あたりとなりの番太郎にめをかけられしに、ある夜茶をのめとて番床へよびにやられしが、番太ちやにうかされると夜ねられませぬからまいりますまいといふ、長者いよ〳〵きづかはしく、そんならや去よくをきてくはぬかといひやりければ、ありがたうござりますが、只今ねいりはなでござりますから參りますまい、

居風呂

いなかからとまり客があるに、居風呂をたてゝいれられしに、此客風呂に入りて半時ばかり音も沙汰もなし、てい主きづかひに思へど、はやくあがられよともいゝにくゝ、湯殿の口にたゝずみて、ゆるりとお入なれといへば、返事するをきゝまづおちつきて居るに、まてどくらせど音もなし、又もふしんに思ひ、又々ゆるりとお入なされといへは返事のこゑあり、やゝ久しくしてゑびのごとく赤くなりて風呂よりあかる、つれの客が見て、いかう長湯をめさせられたといへば、「ハテ御馳走てはあらうが、湯を去いられるもせつないもんだ、

野島地藏

のしま地藏、給金八文にて奉公人をかゝえ、開帳すみて歸られしが、かゝえし處の奉公人ひとりも引起ものなし、早々請人人主をよびて、なぜ奉公人はみえぬといへは、請人何をかくしませう、御給金をつかひこみまして、夫故引こす事がなりませぬといへば、地藏尊大きにいかりたまひ、それは以ての外のふとゞき千萬、して給金を何につかひこんだといへば、請人「請狀歸に錢湯へまいりました、

柱かくし

この頃ふる道具やで雅な柱かくしをかつて來たが、何かよめぬ字がかいてある、來てよんで見てくりやれ、「ナンダ唐樣かな「ヲヽサからやうとも〳〵、大方たれぞ手かきのかいた物であらう、「ドレいつて見やうとつれだちて行けは、床わきの柱にかけてある、よみて見れば墨くろ〳〵と「御手つけ三日切、

赤飯

これ〳〵謎をかけやう、石のかたはれとかけてなんととく、「サレバなんであらうと小首をかたげて、かんがへどうも去れぬ「ながさうか〳〵「ヲヽながして下さい「ハテ赤飯といふ事じやハナ「ヘヽエざんねんな、をれもこはめしとまでは氣がついた、

三味せん

おむすめごの三味せんは、きついものでござる、晩にさるおやしきに日待があるが、やらつしやらぬかといへば、ふた親イエ〳〵どふいたして、またそれほとに參りませう、やう〳〵このごろ二三段ほかはあげませぬ、それに聲はたちませず、といへば「ちつともくるしうない事、當世はまづ一ころび二聲と申ます、

乞食

北風はけしく雪ふる夜、宿なしのこつじきども大勢あつまり、なんとけしからぬ寒さだとて、こもをたくさんあつめ來りまはりをかこひ、サアこれでちつとあたゝまつたけれども、足のつめたいにこまつたものじやといへば、中にきてんなやつありて、どれ〳〵去かたがあるとて、近處の犬四五疋だいて來て、その下へ足を入れて寢ければ、ことの外あたゝかにて、みな〳〵寢入けるに、夜半に一人大聲あげれば、皆々おどろき目をさまし、何事だといへば「いま〳〵しいこたつにくらひつかれた、

疊屋

疊屋さん〳〵といてだち、吉原へ行あそびけるが、床に入て女郎はなしなかばに、客の肘を見ればたこあり、女郎おかしくおまへは疊やさんだのといへは、「いんにや腕押の指南さ、

碁

人々よりあひ碁をはしめけるが、その内にきはめて助言いひたがるものあり、人のうつ碁をわきから見て、こゝをきれのかしこをおさへよのと、口をたしてやまず、ごうち共うるさがり、助言のいひたきはとかく目て見るゆへじや、はやくかへり玉へとおひ出す、かの者きいていかさまこれは尤じや、おれも見れば目のとくじやとて、半町ばかりかへりしに、むかふから二三人づれにて碁ともだち來る、是はどこへ行玉ふといへば、今から上の町の碁けんぶつにゆくといふ、かのものきゝてをれも今まで見ていたが、あまりまだるくてかへるが、お出なされたらおむづかしながら御傳言を致したい、「ナニ用じや「どうみても白が勝じやといつて下さい、

比目魚

歳暮の御祝儀申上ますと肴臺をさし出す、見れば比目魚四枚有、ていしゆ大きに物いまいにてさん〴〵

氣にかけ、其方はかれいをくれた志はかたじけないが、とてもくれるなら三枚か五枚ならきこえた、四枚とはがてんがゆかぬ、さて〳〵ものを去らぬといふて去かりちらせば、ちつともさはがす、わたくしはお去まひより、よかれいとお祝ひ申心で、四枚あげましたものをといへば、ていしゆことの外きげんなをり、おれは又そのやうな事とは去らず、たゝ其方を去かれいといふ事と思つた、

心中

さるうとくなる町人のひとり娘、いつ幾日に聟取の相談ときいてつかへをおこし、二世とかはせし去のび男に、早々文にて去らせければ、男もとるものもとりあへず、例の妻戸のかげにてこそと出あい、きけばきくほど生ては居られぬと、すぐに娘をつれて出て、この世のちぎりははかなくとも、未來はひとつはちすぞと、手に手をとりて行みちすがら、男はふつと心付、けふはいかなる日じややらん、日のあしき時心中すれば、未來にめぐりあはぬときく、どうぞして暦を見たい物じやといへば、女もげにもと思ひ今朝仲人めが、結納の日をみるとて、暦を出してツイそばのわたしが針箱の上においたが、ちよつと歸つてとつて來やうかといへば、男もともに立かへり、もとのつま戸を去のび入、なんなく暦をとりて出、軒端のかげの月あかりにすかし見れば、「血忌

鯛の味噌津 終

うぐひす笛

これは四方赤良（蜀山人号）先生今の蜀山人の若かりし頃、つくりて板下地をも自筆に書給ひしもの也、

文化十三年丙子二月上浣更表裝收藏　三馬

序

春の山の端わらひ初て、雪間の氷うちとけたるに、梅が香いきをはきかくれば、柳の絲も腹筋をよる、笑ふ門には福壽草、三ッ葉四つ葉とさき草の、はなしの種をまき初て、花さく春を待ものならし、

改年堂御慶述

モノモウ　どふれ

扇箱

伊勢屋德兵衛でござります、年始の御祝義申上ますと、扇箱一つさし出すを、旦那殿きゝ付られ、これ一寸あはふと罷出、扇箱の紫皮をはがし、中を明て見てこんな扇がある物か、竹へ紙を挿（はさん）で、要を墨で書てある、ばら〳〵扇は入用にない、是より一本でも、持たれる扇をもつて來たがよいと、さん〴〵の不首尾、德兵衛進み出、それは大きな覺召違、是こそ御武運長久を表し、形は扇に似たれども、實は扇で御座りませぬ「そんならなんだ「矢口の矢でござります、

年代記

田舍もの山下をそゝろあるき、兩面の年代記を見て「いくらで御座る、「十六錢でござります、田舍者煙草入から八匁出して「こゝへ片兩下さい、

萩寺

ぬれて行人もおかしき萩寺の盛り、けふは萩大名さま、宮城野といふ女郎をつれて、お出との評判、はたして紫の幕うつた屋形、前の川へつく、皆々大せい出て見れば、紫の志ぼり染きた一樣の船頭、宮城野その日の出立には、紫ちりめんに萩の惣模樣、紫天鵝絨の帶を志どけなく、脛もあらはに船から出る、そりやこそとみた所が「顏は牡丹餅、

どう忘れ

けふは幾日じやの、「されば、いく日か志らぬ、暦を見たら志れやう、「はて暦を見たとて、幾日じやか志れるものか、「まちやれ今にどこぞから手紙がこよふ、

御門札

若殿のうは氣を見込に、毎日〳〵妾の目見へ、御家老石部金太兵衛どの、ほとんどもてあぐみ、魚鳥留の札のうらに、墨くろ〴〵と書付て、御門に立ける「此所小便組無用、

桑の仙人

日もはや七ッ下りの頃、黑小袖に皮襪（たび）はいた本庄夜應二三千人つれ立て、兩國橋を通る時、辻風さつと吹來り、裾ふきまくれば、はぎの白いも蕎麥切色も、あらはに見ゆるまん中へ、何やらひら〳〵とした物落ける、さては桑の仙人かと、よく〳〵見れば「やつ

こ紙爲、

日暮里

花の雲、鐘は上野の谷中門から、日ぐらしの里へかかり、茶屋が床几で一盃のみかけ、歸りに茶代を拂ひながら、この山の芋の田樂はなんじや、「アイ一串六錢でござります、「ハテ安いもの亭主「それでも鰻鯉になると、十二錢でござります、

盜

ヤレどろぼう〳〵と、棒ちぎり木にて追かけ、あまりに息がはづむゆへ、豆腐屋へはいり、水をもらふてのむに、泥坊も同じく息をつきながら、水を二タ口三口のみ、皆のものをふりかへりみて「サア又ひとかけかけませう、

旦那寺

志の事ありて、旦那寺へ參り、和尚の前へ百銅、お所化の前へ貳百銅つゝみ、盆にのせて差出し、宜御廻向願上ますとて歸りけり、和尚がてんゆかず、弟子に貳百銅我に百銅とは間違なるべしと、弟子の包と無理に取かへて、包紙をあけみれば、「蠟燭二本、

八景

此間唐の探幽がかいた、八景の屏風を求めました、御覽なされ、「いかさま是は各別なお道具で御座ります、是が源氏の晩鐘でかなござりませふ、亭主「されば こちらか平家の落雁でござる、

狸ねいり

初會の客、うれぬ珊瑚珠をみる樣に、蒲團の上にたゝひとり、まてどくらせど女郎はこず、あまり退屈して、小便に行歸りみれば、女郎來て居て「コハまだおやすみなんせんかへといふ、客行燈のわきに立ながら、目をねふり「ごう〳〵

のり合舟

まん〳〵たる海上へのり出しけるに、船すはりて跡へも先へも行かず、是はまさしく龍神の見入たるなれば、何なりとも海へながしてみるがよいと、船頭のいふにまかせて、みな〳〵紙一まいづゝ流しけるに、六十計のおやぢが紙、ずぶ〳〵と沈つめば、そりやこそと人々、おやぢをはだかにして海へつきいれければ、海中にてすつくと立けり、人々これはとおどろけば、船のすはるも道理砂が高かつた、

妬

あしたは奥樣神參りに入らつしやりますが、どうぞお供がいたしとふ御座りますと、こしもとの願ひ「イヤ〳〵あすは人ごみの場なれば、わかいものは供につれられぬ、それともたつて行たくは、こゝへこいとよびよせ、腰元のおねどを二つ三つつめり「それで行つたも同じ事じや、

江戸見物

隣の與茂三が、お江戸さあからもどりやつたげな、うらゝも若い時分は、べうとお地頭さまへ御年頭にのう出申たからハア、お江戸のこんなら流通だア、さらばいつてはなし申さふと、門口からやれ〳〵豆でまつめでたい、こんとお江戸さあの廣大なにやア、うつたまげ申たらふ、與茂三「あせうにもハアいひつくされねいこんだ、あのはや幾世餅はよくきく藥でごんさり申よ、「ヲ、サそしてあの錦袋圓はうまいやつの、

たはら屋

惡寒發熱の氣味にて蒲團をかぶり、取臥居るに、內儀たはら屋をふり出して、下女のりんにもたせやりければ、旦那いたゞいて藥をのむ下女いやな目つきにて「アノだんなさんとした事か、

長竿

夜中に小僧長竿を持て庭に出る、和尚「こいつ何をさをる子僧「空の星を落します和尚「ばかめそこらからとゞく物か屋根へ上れ、

女房

若いものより合、隣のかゝは面はうつくしいが、あつたら事に風がわるい、向ふの內儀は風も顏もよいが、あんまり痩てすげがない、扨よい女房はないものじやと評判すれば、一人がいふさかしあまりよい女房はもたぬがよい、めんよう女房の器量がよすぎると、亭主が若死をするものじや、きさまたちもちと用心しやれといへば、一人がどふぞ小湯を一ぱいもらいたい、「なせといへば「なんだか大分氣分がわるい、

井

あつたら西瓜を井戸の中へどんぶりと落した、ハテどふしたらよからふと、井戸の中をのぞいて居るに、「是〳〵それがのぞいたとて出るものか、そんならのぞかねいけりや出るか、

新五左

新五左二三人非番日に出合、今のはやりはもえぎの小袖に淺黄うらの事だ、「ゑかしそれもあまり當世過る、ヤハリ空色にすみる茶のうらの底至りがよい、「そんなら大小は、「太刀拵の貫の木ざしさ「三德は「萠黄羅紗の事「足袋は「生木綿「頭巾は「いふにや及ぶ袖頭（そでつ）〳〵、

上戸

上戸と下戸久しぶりで出合、上戸「どふだ下戸のたてた藏もないといふが、定めて餅ばかりくつて、人にいやがられるだらう、下戸そしておのしはどふだ、上戸「おれは見せを所々へ出した、「何見世を下戸「ゑれた事小間物みせさ、

湯上り

錢湯にて上り場にきものをふるつてきる拍子、たもとのふんどしふうはりと、向ふの奴のゑりにかゝる、すは一大事と大勢が、かたづをのんで見て居るに、此奴一圓はらたつけしきなく、ふんどしをたもとへいれ、ゑづ〳〵として出行けり、湯番もホッと大息つき、さて〳〵きさまは仕合な、今の奴が定てゆるしはせまいとおもつた、命びろいをしやつたといへば、此男ゑほ〳〵として、いやあまり仕合でもござらぬ、湯番「此人は欲のふかい、命が褌一つぐらゐにかへられる物か、「イヤ角に金が二歩有つた、

竹鎗

此比竹鎗をこしらへた、さて〳〵重寶な物で、まづ犬が來るとはつき殺して、血のついた所をはすに切〳〵すれば、いく度もつきころされる、「そしてその ゑまいにはどふする「藏前へやつて米さしにする、

大入道

親子枕をならべて熱病をやみけるに、むす子のうなり聲親父の耳に入れば、おやぢ「われは若いなりをして、とぼけてうはことといふ、おれは年こそよつたれ、先から大入道が來て立ていれど、こはくもなんともない、

蚤虱

珍客の前にて、脊中のかゆい所へ手をやつた所が、何やら一つとりけり、はて蚤なればよいが、虱だとはぢのかき上げと、ひねりながら「壹歩やらうから飛でくれろ、

鎗の師匠

おらがむす子が鎗のけいこに出てから、どうも物事ぞんざいになつてならぬ、武藝の師匠に似合ぬおしへ方と見へると、親父以の外の腹立、そのまゝ師匠へ出かけ、せがれが段々おせはでぞんざい物になりました、御流義は何でござりますといへば、師匠「拙者流義は投鎗

大釜

盗人ある家へはいり見た所が、人ひとりも見へず、道具といつては内庭の角に、大釜が一つある計、せめて是でももつて行ふと、釜の蓋をとれば「だれだ蚊が這入るは、

水ゑまん

富貴なる茶の湯者、庭に井戸をほり、ことの外よき水ゆへ大事にして、井戸側を高蒔繪にし、貫の木に眞鍮の錠をおろし、鎰は腰にさげて居られけり、友だちの方より客御座候ほどに、お井戸の水をちつと御無心と所望しければ、使を庭へまはし、自身かぎにて錠をあけながら、たま〳〵の御用じや、お役にたつ程あればよいが、

御馳走

コレ長松いくつだと思ふ、ちとおとなしくしやれ、まづ他所へ行て、まんま喰ふた時は歸りに御馳走になりましたといふ物じやぞと、くれ〳〵おしへければ、ある時客に行座敷へすはるやいなや、御ちそうになりましたといふ、親父きのどくがりて、何をいふと叱りければ、「それでもわすれぬ先に、

杖

ヤレ〳〵久しぶりでおめにかゝりました、おなじみの八兵衛もはてました、友だち「イヤそれはモシ此杖を一寸もつて下され「なぜでござる「ハテ横手を打ます、

大人國

海中にて難風にあひ、一つの島へ吹付られけり、此所は大人國にて、人の大きさ仁王の如し、おそろしき事と見ている向ふへ、銅の棒を數十本かついでくれば、あれでぶたれてたまるものかと、一トちゞみになつて見て居れば左にあらで、「はりかねの安うり二文壹文、

益庵老

町醫者同士道で行合、イヤア益庵老御療治がいかふはやります、「イヤモ覺しめしの外大の不景氣、今日もあまりひまで御座るから、近所へのみへにあてどもなくあるいて見ます、「ゑからばわしが隣町に大病人があつて、醫者がみな斷ましたなんと行て療治なされぬか、「大勢の手をはなしたなら、とてもりやうぢは屆きますまい、「ハテ何もなぐさみだ、

橋の下

大晦日の晩、橋の下に乞食夫婦ねていてきけば、橋の上の人通りの足音引もきらず、あまりやかましさにこじきの媒目をさまして、ていしゆにあれは何ぞときけば、「はて云れた事さ、かけ取じやはか、「なんぼかけはとれても、此寒い夜の八つ七つに、外をありくは大ていな事ではない、それよりこふねて居るがましかといへば、亭主枕をもたげて「それはたがかげじやと思ふ、

風の神

風の神の社へまふで、、明日船で西國へ下りますから、何とぞ西風をおふかせなされて下さりませ、神主「そんなら二三日おまちなされ、「いやもう明日下るつもりにいたしました、神主、それでも願がけに東風の先がある、

兩聾

つんぼの飴うり、十ヲ六〳〵といつて居る所へ、是も同じくつんぼの男、もし觀音へはどふまいります、飴うり「十ヲ六でござります此男「かたじけのふござる、

夜遊び

親父むす子をよびよせ、是〳〵わがやうに夜遊びが過ぎてはならぬ、ちと碁遊びにしたがよい、むす子「なにおやしきものではあるまいし、親父「それならせめて一ト切あそべばよい、むす子、わつちらは切見世へは行きやせん、

切落

顔見世の大入、ゑいとう〳〵はめをはづした切落へわり込とて、辨當の重箱へ足をふみ込む、その足を云つかととらへて、大べらぼうめが、この重箱が堀ぬき井戸だとわが命はないは、

夜具

コリヤ坊よかならず人の前で、爺が鷹をきてねるといやんな、夜具をきてねるといやれといひふくめければ、合點しける、ある時ていしゆ隣へはなしに行けるに、小僧もついて行けるが、と、の髪にわらのつきたるを見て「とつさん〳〵、小髪さきに夜具がついてゐる、

鞍馬天狗

牛若丸くらま山にて、木のはてんぐを手下につけ給ふ、あまたの天狗一同に、羽づくろひしてかしこまり、銘々に小さき穴をほる、牛若「これ〳〵あたまを土へほり込には及ばぬ、過分〳〵とありければ、天狗「イヤかふいたさぬと、鼻がつかへます

深川

女房ていしゆの友だちにむかひ、この比わたしらが所では、ねから内にはいつきませぬ、きけば深川へ遊びに行さふでござります、深川はどこへ遊びに行ますな、友だち「大方すそつぎだらう、女房「エ、内には裾づぎをかふ錢もないに、

關取

勸進相撲の大關、相手に云たゝかなげられければ、座中一ぢにどつとわらふとき、あるさじきより花を出しける、おれはまけたに人ちがひなるべしと、よく〳〵みればわが名なり、をしいたゝきがく屋へ行、中をみれば正氣散一ふくあり、ふゑんに思ひかきつけをみれば、これをのみて關をやめられよ、

山伏

近所の山ぶし狐にばかされ、田のくろにて馬糞をくひ居けるを、つれ返りて介抱しければ、やう〳〵正氣つきけり、山伏皆の者にむかひ、やれ〳〵おかげてたすかりました、お禮に魔よけの札を上げませう、

鬼も十八

福は内鬼は外〳〵トン〳〵〳〵「たれじや鬼でござる「ヤアおそろしや「イヤその樣にこはがられるな、ちとむゑんがある、「むゑんとは「節分の豆がほしい「豆をもらつて何にする「年をとります「そんならこの升の豆をみなやらふ「いやたつた十八でよふござる、

非人

五月雨の比、雨ふりつゞき四五日ほどは外へ出られず、ある非人軒の下へすくみゐて、けふの腹はどふだといへば、ひとりの非人はらは太鼓のやうじや「それはよくかせいだな「イヤどうがかわについたとい

ふ事よ、

井の字

火の用心の呪とて、小札に井の字書て、町内の軒下へ張りけるに、醫者の門一軒はらず、大屋はらをたて、お醫者だらうが何だらうが、町の法はやぶられぬといへば、醫者「よくつもつてもごらうじろ、町内で私計門構じやが、門がまへに井の字はちとさしあいで御座る、

閑居

すみだ川關屋の里にかすかなる庵をむすび、窓のつくえにもたれ、書物などみて居るていを見て、あのやうにしてくらしたら、浮世の事もわすれはて、さぞ面白き事であろと、うらやみてみていけるに、閑居の人樣先へずつと出、大あくびして「ア、金がほしいナア、

鴈首

妾あがりの奥樣へ、御簾の内よりそれ鳥目〳〵とのたまふ、御番のさふらひ衆何事やらんとそこらを見れば、柿の蔕(へた)あり、此ことかと思ひ、是は柿のへたでこざりますといへば、おく樣ハテみづからはきせるの雁首と見た、

洩瓶

文盲な男客のもてなしに、何がなめづらしい物に花をいけんと思ひ、ゑびんを買て花をいけ置ければ、客これを見てふしぎそふに、「モシ此花生(いけ)はゑびんではごさりませぬか、亭主「いや左樣な名ある道具ではござりませぬ、

十面

年の暮に米屋眞木屋味噌屋酒屋われも〳〵とつめかけて、お拂は出ませぬかといふ、亭主座禪したるごとく、大の眼をむき出し、一向有無のあいさつなし、かけ取どもあきれはて、お拂はともかくも、なぜそのやうに十面つくつて御座ります、「ハテ九面がわるいから、

くすり喰ひ

おく病なるもの、狼をくへば心つよくなるとき〻、ひと廻りくひて野道に出行たりしに、比はうしみつの空に人通りもすくなかりしに、むかふより來る人あり、すはやためしみんとてまつところに、ほとなくちかつき、なんでもと思ひ、おのれは何ものじやといへば、身は行通るものなるが、夜中にたゝひとりこゝにゐるとはがてんのゆかぬ、そもまあおのれは何やつじやといへば、かの男仰天して、「お前いく廻りあがりました、

酒

今年は豐年だに、ちと酒をつくりのまふ、貴樣米を出しやれ、おれは木を出そふ友だち「水は有物米は買はねばならぬ「其かはり出來た時、上水ばかり取て、跡はきさまにやろう、

うくひす笛終

阿姑麻傳

書阿姑麻傳首

夫言者有言、可以說異國之淫曲乎、實空中之音、水中之月、豈得取之哉、嗟乎舌乎愈悟々乎、無已則博通侏離缺舌游優吟詠使飜彼化此而已、無量先生問得日本阿姑麻傳一本、而飜作藻辭、是實日本淫哇之詞曲者也、余翫味之能通蕃字、能達其語、能解其旨、能成其章、可謂有識矣、夫國初以來、博聞聰明雖多出其間、未嘗聞得異國之淫曲、而能成其章辭者、然我無量先生獨得其極、可稱國初以來一人也乎哉、余一唱三歎之餘、遂煩毛穎以布言焉、

乾隆丙申春三月

無雜　護愛叟撰

阿姑麻傳

自叙

阿姑麻傳者、東方雜劇歌也、余於日本崎陽之客館、得雜劇歌一本、而閱之、皆蕃字不可識也、故就古人質之、小得解、解則孝貞忠信皆有焉、以爲勸善懲惡、戲以中國之言飜譯之、始欲專每句譯之、而不及、終譯大較耳、傍附蕃字、即如原文矣、是以語意不貫、風格不調、率合附會亦多、覽者恕之、于時乾隆肆拾壹年丙申季春廣臺無量軒識

阿姑麻傳

無量軒飜譯

阿姑麻日本東武燕都人、嘗仕萩野侯之母堂、私逕侯之家士尾華才三郎者、而才三郎、因失公之寶器、亡命逃民市中矣、而阿姑麻亦不仕、退寓父家、父名莊兵衛、燕都材賈也、舗號曰白木、當時患內障、以代賈丈八者任舗事、丈八固見阿姑麻之美艶、私利焉、又同鄉有喜藏者、舗號曰築田、亦利阿姑麻、遂納萬金、求爲贅、於是莊兵衛爲己之貧、乃許之、既至將

婚之日、代賈丈八謂阿姑麻曰、我聞今夜君得良人、不亦悅乎、君當悅之、我當愁之也、今見君之面、歡喜之色實盈々乎哉、阿姑麻曰、惡、丈八是何言也、我聞斯言、則猶欲洗耳、何爲悅之、噫、可恨二尊人、不知妾之心裏、有比目連理之要、與妾不謀而今定婚、可謂好逑、凶也、妾雖欲使夫郎知斯事、未由奈之何、泣然淚下數行、恰似霰矣、丈八聞之以爲頗挑我、忽覺如冷風過頸、恍々惚々、歎曰、我聞思有中、則色見外、誠哉斯言也、君既察之、我焉庚哉、我常想君之色數、欲言而悱々憤々、若存若亡、此所謂言之未出也、恥之不逮也、願入自當慰數日愁苦、

人或謂正法無利驗、然我則謂不可誣、果見君情懷深、且拒婚、唯唯可悅可謝、起拜稽顙、阿姑麻曰、噫、何言也、汝狂乎、我非夫人之爲竭誠、而誰爲竭誠、丈八曰、誰爲夫人、今舖中無一人、卽以我爲夫人乎、日居月諸、雖未自口出、視君則必所易之腰下之擬材、自旦至夕、能使枉者直、且里之少年、諺曰、視彼白木女、美艶無比類、風姿如青柳、面色如白圭、不解曰白木、恐應稱白子、是我所以思君也、不意君亦懷我、不知手之舞之足之蹈之、而當時才三郎、亡命在民市中、以篦頭舖之待詔、爲業出入白木舖、日久之、而復通阿姑麻、如舊矣、一日來聞有贅將婚、意者、阿姑麻平日愛我慇懃甚篤、或平日之言是、則豈有今日之事乎、疑阿姑麻既有異心、而許之歟、我夢不察之矣、乃以爲見欺、怒徹骨髓、欲直入罵之、而未決焉、阿姑麻聞才三來、趨見之、曰、才三郎君何來遲也、懷子怒如調飢矣、言未盡懷抱嗚咽數聲、才三揶揄曰、汝焉待我、今日之事、我既聞秋轉眼罵曰、汝焉待我、今日之事、我既聞

婚之日、代賈丈八謂阿姑麻曰、我聞今夜君得良人、不亦悅乎、君當悅之、我當愁之也、今見君之面、歡喜之色實盈々乎哉、阿姑麻曰、惡、丈八是何言也、我聞斯言、則猶欲洗耳、何爲悅之、噫、可恨二尊人、不知妾之心裏、有比目連理之要、與妾不謀而今定婚、可謂好逑、凶也、妾雖欲使夫郎知斯事、未由奈之何、泣然淚下數行、恰似霰矣、丈八聞之以爲頗挑我、忽覺如冷風過頸、恍々惚々、歎曰、我聞思有中、則色見外、誠哉斯言也、君既察之、我焉庚哉、我常想君之色數、欲言而悱々憤々、若存若亡、此所謂言之未出也、恥之不逮也、願入君之夢中、告我意、仍不顧代賈之重任、日至金龍精舍（金龍精舍在東武安置觀音大士寺有石拂地藏爲世所信仰）念地藏菩薩一七日、願曰、南無因果地藏尊、嗚呼是何惡因緣、願與阿姑麻偕老、假使巫山一雲雨、歡娛未盡哀別至、

之、汝莫再言、人面獸類、雖不足譴之、不知汝性來、犬乎狐乎、抑狸乎、何巧使人迷至於此極、其甚使擊搏妾軀、慰君心、雖死且無悔、千舉萬擊、即倦後、唯願聞恕罪之一言、以身觸才三之膝、細語窮愁、呑聲哭、於是才三慚悔失色、日、我雖知君之厚情、或疑今日之事、君許之歟、我短才不問事之是否、卒爾打擲、罪當死、雖然是則愛君之好心耳、余不幸失我公之茶盒、爲再檢索之、故亡命漂泊、爲笼頭舖之待詔、僧石之儲、朝暮之事、皆煩君之甕中、厚情何日忘之、爲一朝之怒、不勝恥、願勿恨之、又願勿泣、勞

之、撫之、慷慨更深、父莊兵衛意、知阿姑麻與才數患內障、計策悉違、材行計帳、償之無術、三通、而謂阿姑麻曰、今日之事、我與汝不謀定、過有喜藏者、唯面前相識、而貸大金、令償逋欠、之、知汝心裏、不悅、當以我爲不慈、我豈不知、豈意喜藏利、汝姿色、以媒謀之、或不許之、則汝之意乎、雖然有說、汝須聽我言、我非生而爲賈者、則本佩甲乙刀者也、犯罪將就刑、幸遇主家岳降之秋、忽蒙貞室仁慈之恩、逭刑、於民市、委身於當家、而先主恤不敏、感貞實、妻以最愛少艾、讓以白木大舖、且理命、曰、愼勿忘家業、謹勿移祠堂、并命及阿妻之事、我愼守之數年于茲、不虞天災燒家、代賈不脩、志之盟夫許婚於餘人乎、雖然我平生未盡一曰、嗚呼、悲夫也、我一旦雖守父命、諾之、豈棄本央離、奈之何、涕泣數聲、阿姑麻泣從之、而出歎、婚歟、我非木岩、豈不知汝之心裏、然義不可須先主於九泉乎、願察我心裏艱難、而爲喜藏許却家室償、然棄阿妻於道路、而何面目可見、將收、我陷此姦計、無逭之地、我且欲沾、汝之意、雖然有說、汝須聽我言、我非生而爲賈者、則本佩甲乙刀者也、犯罪將就刑、幸遇主家岳降之秋、忽蒙貞室仁慈之恩、逭刑、於民市、委身於當家、而先主恤不敏、感貞實、妻以最愛少艾、讓以白木大舖、且理命、曰、愼勿忘家業、謹勿移祠堂、并命及阿妻之事、我愼守之數年于茲、不虞天災燒家、代賈不脩、

片孝。今父君責我以理、違之則爲不孝、不違則爲不貞、孝貞之道、安得兩全、不若捨身死節、以示萬衆、但難忘才三郎君、願君百千年之後、地下相逢、勿相棄、且悲二尊人聞我死、則必驚且泣、奈之何、以我一女、平生情鍾甚篤、朝夕恩愛絶、不孝之罪焉得逃、溟濛血漬黃絹袂、俄而喜臧着吉服至而謁莊兵衛、才三於屏所、僧見之、則奪茶盒之賊也、一悅一怒、密共阿姑麻謀、於是、阿姑麻欺勸酒、遂以匕首刺殺之、而茶盒爲代賈丈八見奪、不得之、捕賊令擒阿姑麻、以殺夫之罪論之、將就刑、而會才三捕丈八至、丈八遂自陳共喜藏盜茶盒之終始、於是、捕賊令藥市丈八及喜藏屍、阿姑麻暫雖在縲紲之中、遂得免、而配才三、才三亦奉茶盒、復仕萩野侯、才三阿姑麻自同牢之後、夫婦愛而敬之、相待如賓、雖鴻光鮑桓、不足言其節義、聞者莫不稱歎而慕其貞忠焉、

阿姑麻傳終

刊阿姑麻傳跋

飜譯阿姑麻傳者、我無量先生之所著也、先生嘗曰、夫著述之法、有古今之異矣、蓋三代之隆、則著至德要道焉、至于戰國、專委利害之辯焉、漢魏以下、乃文乃武、或稚或俗、而卒無歸一之論矣、

清德隆盛、治教休明、於是海內嚮風、文客如雲、詩人如林、世仁之期、今也將及、而今吾黨之士、及治國齊家之言、則借倫殊甚乎、於是先生舍其雅正、而取其戲言、爲此一帙、使二三子發歡喜之色、而散豹睡之憂、可謂循々然能誘人而已、余以爲獨樂、不若與衆、乃請先生付之剞劂氏矣、願先生之功、亦可以垂諸不朽、因述鄙情耳、覽者勿以余言之微、而忽之也哉、

乾隆肆拾壹年丙申暮春

門人　新案　痴子謹跋

明治四十年五月三十日印刷
明治四十年六月一日發行

新百家說林　獨山人全集卷二

編輯兼發行者　合資會社　吉川弘文館
代表者　吉川半七
東京市京橋區南傳馬町一丁目十三番地

印刷者　本間季男
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所　內外印刷株式會社分工場
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

發行所　東京市京橋區南傳馬町一丁目　合資會社　吉川弘文館

사6B85

918.5
O 84b